

知多郡の近世村落の成り立ちに関する一考察

—一色村の場合—

日本福祉大学知多半島総合研究所 教授 高部 淑子

はじめに

一色村（現美浜町）は、南北2キロメートル弱、東西55メートルほどの伊勢湾に面した小さい村である。『美浜町誌』⁽¹⁾ などでも紹介されているとおり、この村は廻船、それも瀬戸内産の塩の輸送を得意とする廻船が多数存在する村であり、主な廻船主として夏目家・伊藤家・野村家などが知られている⁽²⁾。

しかし、廻船の活動が注目されるのに対して、村としての実態は必ずしも明らかではない。一色村の村または庄屋が作成した公的な文書は、まともに伝来した文書群としては現在までのところ確認されていない。そのため村に関する研究が深められないという面は否定できない。しかし、『美浜町誌』などでも利用されているとおり、徳川林政史研究所や一色村本郷内にある正蔵寺に数点の文書が伝来している。正蔵寺所蔵の文書は、庄屋を勤めた家が一色村を離れる際に寺に託したものといわれている。

本稿では、一色村の村方文書を紹介しながら、一色村の実態の一端を具体的に明らかにしたい。

1 一色村の概況と地誌に記された一色村

一色村は、上野間・奥田・細目・柿並（いずれも現美浜町）などととも「野間七郷」と称され、古くは細目村（現美浜町）の枝郷であったといわれている⁽³⁾。しかし、1608年（慶長13年）の「尾州知多郡野間一色村御検地水帳」が野間大坊に伝来している⁽⁴⁾ ことから、江戸時代初めには一つの独立した村として成立していたことがわかる。

一色村の村高は、元高が22石余、概高が33石余、それに加えて1669年（寛文9年）に高に編入された3石余の西新田がある。天保期の村絵図⁽⁵⁾ には、西新田以外に中新田・辰新田が描かれている。1822年（文政5年）成立の「尾張御

行記」⁽⁶⁾ にはこの両新田の記載はないので、両新田とも19世紀前半に開発された新田と思われる。明治初期に編さんされた「旧高旧領取調帳」⁽⁷⁾ 記載の村高は38石余である。

村の土地は柿並村のなかに分散して存在する。長堀川（現杉谷川）と細目村川（現富具崎川）の間に、本郷と西新田・中新田が一つの集落を構成する。長堀川の北側に、南奥田村（現美浜町）と接して枝郷である若松の集落がある。若松と中新田の両枝郷は1803年（享和3年）の成立である⁽⁸⁾。どちらの集落も耕地は集落と海岸線の間に位置する。若松の東側少し離れた場所に三ツ一場の見取畑があり、若松の集落に接する場所と三ツ一場の見取畑の近くに辰新田が開かれている⁽⁹⁾。

「寛文村々覚書」⁽¹⁰⁾ および「尾張御行記」によれば、村の総面積（年貢賦課対象地）は2町6反5畝29歩である。その内、屋敷地が1町7反3畝13歩であり、総面積の約65%を占める。残りの耕地はすべて畑である。これは前述の1608年（慶長13年）の「尾州知多郡野間一色村御検地水帳」の時から変わっていない。それに対して戸数・人口は「寛文村々覚書」では147軒・822人、「尾張御行記」では295軒・1237人である。

村況について「尾張御行記」では次のように記している。

【史料1】

一此村は海浜にありて民家多く少高なる村故に皆地子なり、（中略）此村は戸口多く漕賈漁者軒を連農屋はなし、（中略）此村は往古より漕漁を産業とし、覚書にも平田船四十二艘舟役御用の時舟水主出ず、大網二帖地引網七帖、立網役・浮引網役定納金米山方へ納むとあり、此村は漸々と漕賈漁師共に利潤を得、船数も増し今三百石積より九十石積まで波不知船四十六艘・

漁船四十艘あり、第一塩薪其外商ひ荷物運漕を以て営みとせり、漁業はいわし・ひしこ其外小魚を捕る

戸数に対して村高が小さく、「農屋」がないと記されるとおり、「寛文村々覚書」「尾張徇行記」に記された数字から算出すると、1軒あたりの石高はそれぞれ0.25石、0.12石となる。とても農業による再生産が可能な経営規模ではない。そのため、年貢ではなく「地子」上納の形態を採っていることが記されている。しかし、「寛文村々覚書」および「尾張徇行記」に記されている年貢率は、本田が51.5%、西新田は53%であり、かなりの高負担である。これらのことは、一色村では石高で示される農業生産力で村や家を維持することが前提とされていないこと、石高が役負担の基準として機能していないこと、年貢率が30～50%の村々と比較するとむしろ役負担は重いことを示している。

【史料1】にあるとおり、農業への依存度が低い一色村の主たる生業が、漁業と廻船業である。

漁業に関しては、「寛文村々覚書」に大網2帖・地曳網7帖と記され、立網役・浮引網役・鯛上り役を勤めている。その他にも、藩主の朝夕の食材を上納する御菜役、七夕などの肴を上納する七夕役も、一色村に賦課されている。「尾張徇行記」でも、原則としてこれらの役負担は継続して賦課されている。漁業関係の役は大網役と小漁役に整理され、鯛上り役は漁獲がなくなったため現物納から米納に変更されている。

主な漁獲物は鯛である。

【史料2】⁽¹¹⁾

一此辺鯛の漁事あり、塩尻に鯛は小漁なれと其群をなし来る時これを漁るわさまた甚し、其人網罟長三百数十間広さ四十余尋、尾勢三の浦五十余条、一縄の費数百の金、たやすく製する事あたはず、凡そ一網を以て数艘の船に載せ海中に索施はりをくに、漁人六七十人各自船を回らし漸に罟を牽て磯に寄す、其際一漁者の村君と呼ぶ者、常に食を給し給ふ、船中に立て或は手を

あげ足をのべ、さまざまの容をなす、諸漁これを見得す其指揮に随ふ、中頃甲州武田家の軍士萩原常陸此所為を見てこれをうつし軍中の指揮とせしとそ、さて浜近くふりて網をあけ鯛を取て大船にうつし入、村民七八十人つゝこれを持はこぶ事ひきゝらす、一日の中両三に及ぶ事ありしとそ

長さ三百数十間、広さ40尋を超す巨大な網を仕掛け、複数の船で「村君」とよばれるリーダーの指示に従い、大がかりな鯛漁を展開していたことがうかがえる。

もう一方の廻船業は、「寛文村々覚書」では平田船42艘だったのが、「尾張徇行記」では、90～300石積の波不知船が46艘と、船数の増加と大型化が認められる。「波不知船」と記されているが弁財船も含まれていたことも想像される。これらの船のうち、塩船10艘は播磨・阿波など瀬戸内から塩を輸送する船、30艘が紀伊熊野から志摩あたりへ航行し薪を運送する船、6艘が名古屋へ荷物を運送する船とされている。

一色村の廻船業の展開については『美浜町誌』に詳しい⁽¹²⁾。それによれば、18世紀半ば以降、一色村では船数が増加し50艘前後で推移する。18世紀半ばに200石積以上の廻船が登場しはじめると、その後船の大型化が進み、天保期には廻船だけでも30艘前後を数えるようになった。『美浜町誌』では、天保期以降を一色村が廻船で栄えた時期ととらえている。

2 18世紀前半の一色村

(1) 一色村の他所稼ぎ

では、一色村の実態を現在確認できる文書からみていくこととする。

徳川林政史研究所所蔵知多郡史料のなかに、「夫食願人数書上帳」という表紙のついた綴がある。この表紙とその記載は後から補われたものである。徳川林政史研究所作成の目録⁽¹³⁾では、この綴は①「奉公人書上」（仮題）、②「享保十八年丑正月・知多郡一色村夫食願人数書上帳」、③「享保六年丑閏七月・男女村之者他所他国へ罷越奉公

仕候書留集」の3点の文書からなる。

①には表紙がなく、個々の奉公人ごとに奉公先と奉公の内容を記した部分とそれを奉公先の場所ごとに集計した部分からなる。個々の奉公人の記載例をあげれば次のとおりである。

【史料3】

三平従弟
勢州へた村下女奉公 すき

「三平従弟」という奉公人の属性と「下女奉公」という奉公の内容は、記載がある場合もない場合もある。しかし、奉公の内容は集計部分ではほぼすべてに記載されているので、そこから補うことができる。奉公先は地名だけではなくさらに個人名が具体的に記されている場合もある。

③には文書作成時に作られたと思われる表紙があり、その表記は前述のとおりである。③の記載内容は、①の個々の奉公人の記載部分と内容・形

式とも同一である。①③の個々の奉公人の記載と①の集計部分を照合すると、奉公先、奉公先別の奉公人数、奉公内容がほぼ一致する。したがって、①③は本来は連続した1点の帳簿であり、これで完結すると考えられる（以下、①③を合わせて「享保六年丑閏七月・男女村之者他所他国へ罷越奉公仕候書留集」と表記する）。

この1721年（享保6年）閏7月に作成された「男女村之者他所他国へ罷越奉公仕候書留集」をまとめたのが【表1】である。【表1】の「人数」欄はこの帳簿内で集計された数字を記したものの、「実数」欄は個別例を集計したものである。したがって、紀伊三木浦・大泊浦への他所奉公は、個々の奉公人としては記載があるが、帳簿内での集計からは洩れているということになる。また、帳簿内では合計75人と記載されているが、奉公先ごとの集計部分を合計すると73人になる。また、末尾に「外二」として正蔵寺に1人奉公人がいること、江戸奉公人が4人いて「房州行」のはずで

表1 他所奉公の奉公先・内容・人数一覧

奉公先国	奉公先村	奉公内容	性別	人数	実数	備 考
紀伊	梶賀浦	船方奉公	男	1	1	
	九木浦	船方奉公	男	1	1	
	大鷲浦	船方奉公	男	15	15	大鷲→尾鷲
	曾根浦	船方奉公	男	1	1	
	三木島浦		男		1	三木浦・三木里浦・二木島浦のいずれか
	大泊浦		男		1	
伊勢	江村	船方奉公	男	1	1	
	川崎	問屋奉公	男	1	1	
	白塚		男	1	1	
			女	1	1	
	四日市	下女奉公	女	1	1	
志摩	部田	下女奉公	女	2	2	
	答志	船方奉公	男	1	1	
安房	岩田村	船方奉公	男	2	2	安房・上総で岩田村確認できず、岩和田村（上総）か
	守谷村	船方奉公	男	34	32	守谷村は上総国
	張子村	船方奉公	男	1	1	安房・上総で張子村確認できず、銚子（下総）か
武蔵	江戸		男		2	
尾張	小野浦村	船方奉公	男	4	4	
		下女奉公	女	2	2	
	東端村	下女奉公	女	1	1	
	岩屋村	下女奉公	女	1	1	岩屋→岩屋寺
	久村	船方奉公	男	1	1	
	東大高村		男	1	1	
合計				75	75	
その他	村内正蔵寺		男	1		
	江戸			4		房州行

あることが記されている。

1721年（享保6年）当時の一色村の人口は確定しないが、前述の人口変化からみて1000人前後というところであろうか。とすれば村の7～8%の人が他所稼ぎに行っていたことになる。

【表1】から、女性は知多郡内や伊勢など比較的近い場所へ下女として奉公に出ていることがわかる。これは近隣の村々もほぼ同様な傾向であることが推定される。一方、男性はかなり特徴的な傾向を示す。商家・農家への奉公はごく少数であり船方奉公が大部分であること、その奉公先は近隣の村である場合もあるが、それより紀伊半島・房総半島が中心であったことが指摘できる。

紀伊半島の奉公先は尾鷲・熊野周辺の浦々である。なかでも「大鷲」（尾鷲）が15人というまとまった人数の奉公先になっている。尾鷲は紀伊半島東側の最大規模の町であると同時に漁業の中心地でもあった。房総半島での奉公の中心は守谷村（現勝浦市）である。守谷村は太平洋に面し、江戸時代初期には半農半漁の村であった。17世紀前半以降、紀州から出稼ぎ漁民が入り漁法が導入されることによって、漁業、なかでも鰯漁が発展したといわれる。

これらの浦々への奉公は「船方奉公」である。奉公先がいずれも漁業のさかんな場所であることから、「船方奉公」は漁民としての出稼ぎであろう。一色村の男性の他所稼ぎは、働き場所を漠然と求めている他所稼ぎではなく、「船方奉公」つまり漁民という職能を活かしての他所稼ぎであったと思われる。それも尾鷲・守谷という特定の浦に太いパイプがあったと推定される。紀州漁業の中心地、あるいは紀州漁法の伝播地との関係、そこでの就業は、一色村での漁業のあり方にも関係する可能性があらう。

(2) 残された村の人々

次に知多郡史料の綴に含まれる1733年（享保18年）「知多郡一色村夫食願人数書上帳」を検討してみよう。

この「知多郡一色村夫食願人数書上帳」は、一色村の庄屋と思われる次郎左衛門・五郎三・孫四

郎の3名が安坂才右衛門に夫食が必要な世帯の一覧を提出した際の控と推定される。この時期の安坂才右衛門は大代官を勤めていたと思われる。

この帳簿の末尾には、「右ハ当村渴百姓之内別而大渴之分如此吟味仕、書上申所相違無御座候、以上」、「右者当村渴百姓之内中渴之分如此吟味仕、書上申所相違無御座候、以上」と2種類の奥書が書き留められている。このことから本来は夫食が必要と判断される世帯をその程度により「大渴」「中渴」に分けて、それぞれ一覧が提出されたはずであることがわかる。

しかし、この帳簿は控であるので「大渴」と「中渴」に分けては作成されていない。まず、夫食を必要とする世帯構成が記され、その最後に程度別の総人数・男女別人数が記されている。

個々の夫食が必要な世帯については次の例のように記載されている。

【史料4】

下	八三郎	年五十四
従弟	きく	年六拾九
姪	いち	年八ツ
八三郎弟三四郎女房		
	つる	年三拾三
ゞ男女四人 内男一人 女三人		

つまり、世帯ごとの世帯筆頭者との続柄・名前・年齢が記され、世帯ごとに人数が合計されている。

最初にある「下」の部分は「中」と記されている世帯もあり、飢渴の程度で、「中」よりも「下」のほうが程度が甚だしいということになる。「中」「下」は一色村が使った便宜的な表記で、「中」が「中渴」、「下」が「大渴」に相当する。

世帯ごとの記載の末尾にある集計によると、
夫食願の人数 335人

内訳 中 84人（男28人・女56人）

下 251人（男82人・女169人）

である。これが最初に一色村が領主に対して提示した人数であった。しかし、これに対して男女共5才以下は夫食の対象外という指示があったらしく、5才以下の人数18人が除外されて再度集計

されている。

これらの数字は、実際に記された世帯ごとの合計と多少異なるため、具体的な記載から集計した実数を記しておく。

夫食願の総数 334 人 (111 世帯)

内訳 中 85 人 (男 29 人・女 56 人)

下 249 人 (男 81 人・女 168 人)

上記のうち、5 才以下の除外者 19 人

内訳 中 6 人 (男 4 人・女 2 人)

下 13 人 (男 7 人・女 6 人)

領主が認めた 6 才以上で 315 人、5 才以下も含めると 334 人が夫食を必要としていたことがわかる。これは、村全体の人数でみると約 3 分の 1、世帯数でみると 5 割強程度になると思われる。

334 人の夫食願の実数のうち、男性は 110 人、女性は 224 人で、女性が約 3 分の 2 を占め、女性の比率が圧倒的に高い。これは世帯構成によると考えられる。先にあげた【史料 4】では、「八三郎」という世帯筆頭者を含む 1 世帯 4 人が書き上げられている。しかし、この書上帳には世帯筆頭者を含まない世帯も数多く含まれている。一例をあげると次のとおりである。

【史料 5】

下 八六 母 年四拾壹

八六弟 六之助 年十貳

八六姉 なつ 年三十五

八六甥 八之助 年六ツ

㊦男女四人 内男貳人 女貳人

つまり、「八六」の世帯ではあるが、「八六」という世帯筆頭者は含まれず、八六の母や兄弟など 4 人が夫食を希望しているというケースである。

こうした世帯筆頭者の有無に注目して、夫食願に記載された 111 世帯をまとめたのが【表 2】である。

【表 2】からは、世帯筆頭者を含む世帯が 35 世帯、全体の 32% を占めることがわかる。そのうち、男性が世帯筆頭者の世帯が 28 世帯、女性が世帯筆頭者の世帯が 7 世帯である。また、世帯筆頭者を含まない場合でも、「(世帯筆頭者名)

表 2 夫食願世帯の構成

世 帯 構 成	世帯筆頭者	程度	家数	人数
世帯筆頭者を含む	男性	中	6	22
	男性	下	22	81
	女性	下	7	17
世帯筆頭者を含まない+後家	男性	中	2	8
	男性	下	9	24
世帯筆頭者を含まない	男性	中	17	55
	男性	下	48	127

後家」と記されている場合、つまり世帯筆頭者が死亡している世帯が 11 世帯ある。この合計 46 世帯が、世帯筆頭者を中心として実際に世帯が構成されている世帯である。

それ以外の 65 世帯は、男性名の世帯筆頭者が記載されていながら、実際に夫食願をしている世帯のなかに世帯筆頭者が含まれていない。こうしたケースが夫食が必要とする世帯・人数の半数以上を占めている。この中には、妻子だけの世帯、あるいは世帯筆頭者の親兄弟だけの世帯、妻子に世帯筆頭者の親兄弟が加わった世帯などがある。

この世帯筆頭者の男性が世帯に含まれないケースは、どのように解釈できるだろうか。世帯筆頭者が一色村に居住しながら、本人だけが夫食願の対象外となることは考えにくい。世帯筆頭者が何らかの事情で一色村を離れ、村に残された家族が十分な食糧を確保できず、夫食が必要と判断されたと考えるのが自然であろう。このケースの世帯筆頭者のなかには、先に検討した「男女村之者他所他国へ罷越奉公仕候書留集」の名前と一致する人もいる。他所稼ぎなどで村を離れて、転居とも死亡とも手続きがとられないまま、留主家族が一色村に居住しつづけていることが想定される。一色村の場合、このような世帯が少なくとも村内の 4 分の 1 程度を占めていたことになる。

3 19 世紀の一色村

(1)「丑年船々帆役家別役割割帳」にみる村内構造

先にみたように、一色村は人口に比して村高がきわめて少なく、漁業と廻船業によって百姓の経営が成り立っていた。そのため、村内におけるさまざまな役負担の基準として百姓の持高は機能しなかったと思われる。そこで、村では独自の基準

を定めていた。それを記したのが「丑年船々帆役家別役割帳」⁽¹⁴⁾である。『美浜町誌』でも推定しているとおり⁽¹⁵⁾、記載内容から天保期ごろの丑年、つまり1829年（文政12年）、1841年（天保12年）のいずれかと思われる。

この史料は、人別に持船の帆の反数を書き上げた前半部と、「本役」から「皆無」まで7段階に分けて人名を書き上げた後半部からなる。前半の帆の反数の書上は、表題にある「帆役」をかけるための記載と思われる。しかし、廻船惣庄屋に納入する船に対する役銀（船役銀）は積石数が基準である。この「帆役」が船役銀とは別に領主から賦課される役であるのか、村独自の役負担であるのかは不明である。

後半部の記載から7つの段階ごとの人数を集計したのが【表3】である。【表3】にあるように、書き上げられた人名は300、ほぼ村の全戸と考えてよいであろう。

「本役」「五分」「四分」「三分」「二分」「見立」「皆無」の7段階に、村内の300軒が区分されている。人名は記入されていないが、「九分」「七分」という割合だけが書かれている。この割合に該当する家が存在した時期もあったのであろう。したがって、この7段階が固定的に設定されていたわけではないと考えられる。

この7段階は、村内での役負担を賦課するときの割合であると思われる。「本役」の役負担を1

とすれば、「五分」から「二分」はそれぞれ0.5、0.4、0.3、0.2の割合で負担することになる。「見立」はその時々を事情を勘案して負担、「皆無」は基本的に負担なしということであろう。ただし、「見立」は「二分」と「皆無」の間に記載されていることから、役負担ををするとしても、その割合は「二分」を大きく超すことはなかったと思われる。

役負担の割合はその時々状況に応じて見直しがなされたようであり、割合が加筆訂正されている場合がある。【表3】の訂正欄はその訂正内容と人数を示したものである。これをみると、「本役」には異動はなく、「三分」から「見立」の間では割合の増減両方向に異動があることがわかる。しかし、この層からは「四分」以上に負担割合を増加させていく家はない。「五分」「四分」は8軒と家数が少ないが、負担割合を増加させる家もある一方で、「三分」や「見立」に割合が低減される家もある。

【表3】からは、まず一色村では村内の90%以上が「三分」以下の役負担割合であり、その分の役負担の大部分を18軒（6%）しかいない「本役」の家が負う構造になっていたことがわかる。その「本役」の家が安定的に維持されているのに対して、その次の層は上下に分解して家数が極端に少なくなっていること、さらに90%以上を占める「三分」以下の層は、「四分」以上の層に異動することがほぼないと考えられることが指摘できる。「本役」と「三分」以下という両極に分解が進んでいるといえよう。

「本役」「五分」を勤める家の一覧が【表4】である。「帆反数」はこの史料の前半部にある各人の持船の帆の反数を記した部分の記載内容である。廻船と見なされる200石積の弁財船の帆は14反程度なので⁽¹⁶⁾、「本役」の家18軒すべてが廻船を所有していることがわかる。

「本役」以外には、「五分」に3軒、「三分」に1軒、「見立」に1軒の廻船所有者が存在する。また、150石前後の積石数と想定される11～12反の帆を持つ船の所有者は、「三分」に1軒、「二分」に2軒、「見立」に1軒存在する。廻船やそれに準ずる船を所有する家すべてが「本役」を負担す

表3 「家別役割帳」の人数分布

役 割	人 数	訂 正
本役	18	
9分	0	
7分	0	
5分	6	9分→7分：1人 7分→5分：1人 3分：1人 見立：1人
4分	2	5分：1人 見立：1人
3分	20	2分：1人 見立：1人
2分	73	3分：2人 見立：13人
見立	179	3分：3人 2分：28人
皆無	2	
合計	300	

表4 「本役」「五分」の人名一覧

役 割	人 名	帆反数	施 行	備 考
本役	伊平治	18+4	(天保10) 紬1反	
本役	藤次郎	20+19	(天保10) 袴着1反 (嘉永4) 0.7石	
本役	藤重郎	18+2+3	(天保10) 紬1反	別の箇所に5反の記載あり
本役	甚七	19+19+18+18+3	(天保10) 紬1反 (嘉永4) 3.5石	
本役	伊助	19+18+4	(天保10) 袴着1反 (嘉永4) 1石	
本役	長八	20+19+5+17	(天保10) 紬1反 (嘉永4) 0.8石	
本役	六郎兵衛	24*+18+16	(天保10) 袴着1反	24反の内14反引
本役	長五郎	18+18		
本役	平吉	18		
本役	嘉七	18+19	(嘉永4) 0.8石	
本役	七郎平	20+18+4+14*+2+19*	(天保10) 紬1反	14反・19反抜き
本役	次郎助	18+18*		18反甚四郎に成る
本役	平三郎	8*+2+19+4+17	(天保10) 紬1反 (嘉永4) 3.5石	8反抜け
本役	仲助	16*	(嘉永4) 0.8石	2反増
本役	八兵衛	23		
本役	重兵衛	17		
本役	甚左衛門	18		
本役	甚蔵	17		
5分	佐右衛門	20+10*+1		10反抜け
5分	弥三八	23		
5分*	市郎兵衛	18	(嘉永4) 0.8石	9分さらに7分に訂正
5分*	弥助			見立に訂正
5分*	平五郎			3分に訂正
5分*	甚四郎			7分さらに5分に訂正

注：*は加筆訂正があることを示す（備考欄参照）。

るわけではない。また、「本役」以下の基準で負担する役と「帆役」とは、対応しないので異なるものである。しかし、廻船を所有することは「本役」を勤める家への第一歩であり、結果的には廻船主が蓄積した経済力が村の経済的基盤となっていたといえよう。

(2) 正蔵寺所蔵文書にみる村内構造

正蔵寺には、一色村に関わる文書として、1833年（天保4年）6月「諸願達之控」、1848年（嘉永元年）2月「横須賀御陣屋諸願達之控」、1849年（嘉永2年）「漁師願達留」の3点が保管されている。「漁師願達留」は熱田羽城の漁師との漁場争論など、漁業にともない他村・他地域との関係を構築する必要から作成された願書などの控である。したがって、ここでは「諸願達之控」「横須賀御陣屋諸願達之控」から一色村の構造を考え

ることとする。それぞれ表紙には、「庄屋 四郎兵衛」「一色村庄屋 伊平治」とあり、この2点は村の公的な記録として作成されたものである。

この2冊の文書のなかには、施行に関わる記録が2点ある。「諸願達之控」には、一色村の9名に対して、窮民への施行を理由に紬・袴地が下賜されている。「凶年打統一統難渋之時節」とあり、その前後の文書からも天保の飢饉時の施行に対して1839年（天保10年）に与えられた褒賞と思われる。

紬1反を下賜されたのは、長八・甚七・七郎平・池谷伊平治・藤治郎・平三郎の6名、袴地1反を下賜されたのは、藤十郎・六郎兵衛・伊助の3名である。【表3】【表4】とほぼ同時期であり、この9名はすべて【表4】の「本役」を勤めた家の人物と考えてよいであろう。この例では、施行を行い褒賞を受けたのは「本役」18軒の半分だけ

である。また、紬と袴地という下賜品の違いは施行の規模の違いと考えられ、役負担の割合としては同じ段階に属する「本役」も均質ではなかったと考えられる。

また、「横須賀御陣屋諸願達之控」によれば、1851年（嘉永4年）には村内で施米が行われている。施行用の米を出したのは8名、それぞれが出した米の量は次のとおりである。

夏目平三郎・夏目甚七	各3石5斗
伊助	1石
長八・市郎兵衛・仲助・嘉七	各8斗
藤次郎	7斗

この合計11石9斗の米が、村内の77世帯238人に対して、1人につき5升の基準で施行された。施行を受けた77世帯は村内の約4分の1に相当すると思われる。この施米で生活維持に十分であったかはわからないが、村の1割にも満たない家で、村の4分の1の家の家計を支えるという不均等な状態をうかがうことができる。

施米を行った8名中7名が、【表4】の「本役」を勤める家である。市郎兵衛は「丑年船々帆役家別役割帳」で「五分」とされ、その後「九分」「七分」と加筆訂正されている家と思われる。ここでも、「本役」を勤める家が村の成り立ちを支えていること、「本役」のなかにも施米を出す家と出さない家があり、出す米の量も7斗から3石5斗まで大きな開きがあることがわかる。つまり、「本役」といってもその内実は一様ではなく、場合によっては、「本役」の中でさらに格付けがあり、それに応じて役やその他の経済的負担が行われていたと考えられよう。

(3) 蔵役をめぐる

1842年（天保13年）尾張藩は領内に向けて一つの触を発した。

【史料6】⁽¹⁷⁾

正金引替添銀段々高料相成候ニ付、追々格別ニ御世話有之候得共、兎角不引下、当時ニ而ハ却而引上、随而錢相場并諸色直段迄も格別引上、一統難渋不少候、付而ハ米切手被減方応而可取計之處、從來

御不如意之御勝手之上、当時御操合筋別而御差支之折柄、右之儀取煩難相調候、併当節之模様を以ハ御国内一般之難渋難被忍候間、右補之為在町共当寅年与拾ヶ年之間蔵役為相勤、右役金を以減切手取計候様ニとの御事ニ候、就夫近年在町共追々調達金等申渡、其上米切手減方へ付厚志之者共ハ消切手上納をも奉願候時節ニ付、此上役金等相勤候儀ハ何共難被 仰出筋合ニ候得共、添銀高料等之儀当然差懸り其分ニ難成置候ニ付、不被得止無余儀前件之通被 仰出候事ニ候間、右之御主意深相弁、御国恩冥加之為銘々土蔵所持之分ハ壱戸前ニ付壹ヶ年金式分宛、其支配之奉行所へ可致上納候、尤右蔵役之儀拾ヶ年と被仰出候得共、此已後添銀等及下料前々之通相成候ハ、猶御吟味之上役金上納御免可被 仰出候間、兼而其心得可有事

四月

この当時、尾張藩は貨幣金融政策の一つとして米切手の回収を行おうとしていた。米切手と正金を引き換える際の添銀が高騰して錢相場や物価にも影響が及んだため、藩は米切手を回収する必要があると判断した。しかし、米切手と引き換える正金が不足しているため、土蔵へ役を賦課して財源に充当することとしたというのである。1842年（天保13年）からの10年間、1蔵に対して1年に金2分を賦課し、添銀が安くなればこの蔵に対する役賦課は再度検討するとされている。

【史料6】は、小鈴谷村（現常滑市）に伝えられた触の写である。【史料6】につづいて「蔵戸前数等奉書上候御事」として蔵戸前の書上の雛形が提示され、1棟ごとに棟数・戸前数・所有者を書き上げるように指示されている。小鈴谷村と一色村は同じ横須賀陣屋の支配であるので、一色村にも同じ触が伝えられたであろう。同文の触は『新編一宮市史』資料編8にも収録され（2949号）、起村（現一宮市）・荷之上村（現弥富市）の添書には陣屋より同心が廻村して調査することが記されている。

この触に対して一色村ではまず次のような伺い書を提出した。

【史料7】⁽¹⁸⁾

乍恐御窺奉申上候御事

今般正金引替添銀高料ニ相成り候故、米切手御減方ニ付、御国恩冥加相弁、銘々扣土蔵壱戸前ニ金式分宛蔵役可相勤旨御触之趣奉畏候得共、村方銘々扣蔵之儀ハ、九尺式間或者式間三間ニ而、ぬり揚ニいたし本戸前蔵等ハ当村ニ二ヶ所方無御座、外ハ名目計リ之蔵ニ而簀戸等計リ候処、尤当村百姓持蔵之儀ハ、種物・飯米・肥し物并船持ハ船具類其外御百姓諸事之道具入置候物置ニ而、火用心并鼠不入様ぬり揚ニいたし罷在候儀ニ御座候、右ニ而も一蔵ニ金式分宛御上納可仕儀ニ御座候哉、大蔵ニ而本戸前附或ハ売買之高金物入置候分ハ宜敷御座候、何も御百姓之物置ハ名目計リ之蔵ニ而、時々之肥物或者飯米諸事道具等入置候分ニ御座候、右物置同様ニ而も一戸前ニ金式分宛御上納可仕儀ニ御座候而者、乍恐甚迷惑難渋仕候、此節添銀も少分ニ相成り候事故、乍恐御見分之上夫々御仕訳被成下候而、其上御上納可仕候様被為仰付被下置候様仕度奉存候、依之乍恐御窺奉申上候、以上

寅四月

一色村庄屋
四郎兵衛
組頭
嘉右衛門
同
重左衛門

渡邊次郎兵衛様御陣屋

一色村の主張は次のとおりである。一色村にある蔵のうち、漆喰塗り・本戸前の本格的な蔵は2棟だけである。他の蔵は、大きさは長さ2間・梁9尺あるいは長さ3間・梁2間程度で、百姓家では農業に必要な種・肥料や飯米、船持の家では船の道具、その他普通の百姓が所持する道具を入れていて、扉も簀などであり鼠除けや防火のために漆喰塗りにしているだけで、名目は蔵であっても物置と同様の建築物である。本格的な蔵や商売上の高額の商品を入れてある蔵に蔵役を掛けることに異存はないけれども、物置同様の蔵にまで年に金2分の蔵役を掛けられるのは認めがたいので、

見分をして賦課対象となる蔵と賦課対象外の蔵を分けた上で蔵役を賦課してもらいたい。

その後「諸願達之控」に残されている一色村から提出された蔵役に関する文書は次のとおりである。

1842年（天保13年）6月付

- ①蔵役を負担する蔵の一覧
- ②蔵役を免除してもらいたい蔵の一覧
- ③納屋の一覧（蔵役免除希望）

同年11月付

- ④蔵・物置の一覧
- ⑤極難渋を理由とする蔵役免除願2通

これらから、蔵役をめぐる経緯は次のように推定される。4月に【史料7】を出した後、その主張に基づき、6月に一色村から村内の蔵・物置を、賦課対象となるものと賦課対象外のものに分けて届出をした（①～③）。①②の書式は【史料6】の直後に示された雛形に合致している。③は納屋であるので「戸前」の数ではなく「戸口」の数が記されている。

一色村が蔵役の賦課を受け入れたのは蔵35棟・戸前40であった（①）。それに対して、蔵役の免除を願い出た蔵（②）は19棟・戸前21であった。免除を願う蔵を書き上げた後には次のように記されている。

【史料8】

右之者共儀者何レ茂内輪甚難渋ニ而、右銘々扣蔵并家屋敷迄も借財之方江質物ニ書入置候程之儀ニ而、至而絶窮ものゝ儀ニ御座候間、何卒右蔵役御免被成下候様偏ニ奉願上候、尤御免相成候共外蔵役相勤候者共江差響候儀少シも無之、村中納得之儀ニ御座候間、右願之通御聞済被下置候ハ、難有仕合ニ可奉存候、以上

蔵役賦課の対象外としてもらいたい理由として、蔵は既に抵当になっていること、所有者が困窮していることをあげている。

③の納屋は51棟・戸口85が書き上げられている。しかし、村としては蔵役を賦課してでも増収を図る必要に迫られている「御時節柄」なので、

納屋も一応書き上げたまでで、蔵ではなく納屋(物置)であるので役銀の賦課対象外となることを希望する旨が記されている。

しかし、このような賦課対象・賦課対象外を区別した蔵役負担の村からの申し出は、領主側には受け入れられなかったようである。そのため、11月に蔵役の賦課対象となる蔵・物置を再度書き上げて提出した(④)と考えられる。

6月の時点での蔵・納屋の総数はそれぞれ54棟、51棟であった。その内、蔵35棟だけを蔵役賦課対象と設定したのに対して、④では蔵53棟(うち1棟抹消)、物置11棟が書き上げられている。6月から11月の間に【史料7】にあるように村が希望していた見分が行われたのかは不明であるが、蔵はほぼすべてが賦課対象となり、物置(納屋)は賦課対象となるかどうかの仕分けが行われ、11棟だけが賦課対象となったということになる。

本来賦課対象となるべき蔵・物置のなかで、例外的に賦課対象外としてもらうための願書が⑤の2通である。1通は蔵・物置が抵当になっていて所有者が極難渋であるとの理由で蔵2棟・物置2棟を、もう1通は蔵の一部が朽ち損じているため取り壊し予定であるとの理由で蔵1棟を、それぞれ役銀の対象外とすることを願い出ている。

この蔵役をめぐる経緯からは、新たな役を賦課しようとする領主と村の駆け引きが見てとれる。一色村も蔵役に全面的に反対なのではなく、【史料7】にあるように本格的な蔵や商売で使用している蔵に役銀が賦課されることに対しては当初から肯定的であり、①で書き上げられた35棟については蔵役賦課を受け入れる意思があった。この35棟の蔵の所有者16人のうち13人が(1)でみた「本役」を勤める家であり、反対に②で蔵役の免除を希望する蔵の所有者には「本役」の家は含まれない。【史料8】に蔵役賦課免除を願うことが蔵役を勤める者に影響を与えることはないと言っているとおりの、誰が役を負担すべきなのかという点に関して、一色村の明確な基準がありその論理が村内に浸透しているようにみえる。

しかし、領主側には可能なかぎりの蔵を蔵役の

賦課対象としようという強い意志があり、村としてはほぼ全ての蔵と一部の物置を蔵役賦課対象とすることを受け入れざるをえなかったのであろう。それでもやはり蔵役の負担が困難と判断した事例だけを、特例として免除を願う(⑤)ことになったと思われる。最終的には、領主側の強い意志が村の論理を押し切った結果となったといえよう。

19世紀前半、一色村の家数は300軒前後、最初に見たように狭く村高も極端に少ない村である。その村にそれぞれ50棟を超す蔵と納屋が存在していた。「本役」の家が所有する蔵が32棟、納屋が28棟である。それ以外の家が所有する蔵が22棟、納屋が23棟となる。もちろん村の1割にも満たない「本役」の家への集中度合いは高いが、「本役」を勤めない家でも、ある程度の家財や生産手段を保持していたといえよう。このように、村やその内部の経済力や成り立ち方が、石高だけでは表されない村も存在する。そのような村のとらえ方、そのための石高以外の指標などを考える必要があろう。

(4) 一色村の年貢をめぐる

先にみたように、「尾張御行記」には一色村は耕地が少ないため「地子」であること、年貢率は本田が51.5%、西新田は53%であることが記されている。正蔵寺所蔵の文書から、年貢に関する記載を探してみることとする。

「横須賀御陣屋諸願達之控」には、年貢上納の際の一色村からの届出の控がある。

【史料9】

当酉年御年貢米仕訳
 一米三拾貳石 一色村
 内五石五斗山方 岩本弥左衛門取扱
 御払居米引合申候
 右之通御上納仕候、仍之御達申上候、以上
 酉十月 右村庄屋 伊平治
 横須賀御陣屋

この「酉」はこの史料の前後の記載から 1849 年（嘉永 2 年）と思われる。ほぼ同じ内容の記事が 戌（1850 年・嘉永 3 年）・亥（1851 年・嘉永 4 年）・丑（1853 年・嘉永 6 年）の各年にもある。さらに、上納高が 29 石と記された記事が、辰（1856 年・安政 3 年）・巳（1857 年・安政 4 年）・午（1858 年・安政 5 年）の各年にある。これが一色村が年貢（本途物成）と諸役を上納した時の届出である。1856 年（安政 3 年）に 32 石から 29 石に減少しているのは、1854 年（安政元年）の地震と翌年の風水害の影響であろう。

この記載から、幕末期において一色村は、年貢として 26 石 5 斗（のち 23 石 5 斗）、網役などの諸役分の定納米 5 石 5 斗を山方に納めていたことがわかる。しかし、最初に述べたように、一色村の本田は 33 石余、酉新田は 3 石余であり、その後に来た中新田・辰新田もそれほど大規模なものではない。明治初年でも 38 石余と算出されている。少なくみても 60% を超す年貢率である。定納米も含めればほぼ村高相当分を上納することになる。

これは役負担としてはかなりの高率である。尾張藩が概高を定めた際に基本と考えた年貢率は 40% であり、地誌類に書かれている一色村の年貢率でも 50% 台である。単に耕地からの収穫に対する年貢・役としては高負担であり、領主が村高だけを基準に年貢を算定していたとは考えにくい。領主は村高以外の村の生産力・経済力をくみ取って、一色村に年貢を賦課していたと思われる。

この年貢の算定の基準や方法を示す史料は今のところ見つかっていない。しかし、先にみた蔵役賦課の場合と同様に、村高がいつでも、どこでも唯一絶対の村の生産力を示すわけではないことは明らかであり、村高の持つ意味は個別の村の実態に応じて問い直す必要がある。

この一色村の年貢は、【史料 9】にあるとおり「払居米」として上納された。1849 年（嘉永 2 年）から 1858 年（安政 5 年）の年貢は、いずれも河和村（現美浜町）の岩本弥左衛門の取扱である。知多郡の他の村々と同様、「払居米」による一色村の年貢上納はこれ以前からも行われていたと思

われる。「払居米」とは、一般には年貢の売却先を収穫前に入札で決定して金納させ、実際の米は収穫後に売却先に直接渡す制度である。春先に仕込用の米が確保できることから知多郡の酒造家などが多く利用したといわれている⁽¹⁹⁾。

しかし、一色村の場合の払居米は少し事情が違うようである。

【史料 10】⁽²⁰⁾

乍恐奉願上候御事

当村之儀田方一向無数候ニ付、御年貢御上納米出来不仕、何分内輪取立方難渋仕候間、何卒御払居ニ被為 仰付被下置候様奉願上候、右願之通御聞濟被下置候ハ、難有仕合ニ奉存候、以上

未九月

一色村庄屋
四郎兵衛

小山清次郎様御陣屋

この願書は「未九月」の記載と横須賀代官小山清次郎の在任期間（1832～1839 年）から、1835 年（天保 6 年）9 月に一色村から横須賀陣屋に提出されたものである。一色村では田がほとんどないため年貢として上納すべき米が収穫できないことを理由に、「御払居」で年貢上納したいと願い出ている。この願書の文面からは一色村では年貢米の確保は困難であることになり、それを前提とすれば、「御払居」といっても秋以降に一色村で収穫された現物の米が入札者に納入されることは想定されていないと考えられる。

一色村の「御払居」の実態を示すものとして、次のような史料がある。

【史料 11】⁽²¹⁾

乍恐奉願上候御事

当御年貢米三拾石久村内藤傳兵衛取扱御払居ニ取計申候、付而ハ右御米半数拾五石金主手前ニ囲ひ置候様、先達而被仰渡奉畏候得共、当村之儀ハ畑方式町三反分余田方ハ式反分余ならては無御座ニ付、御年貢米之儀例年村方ハ御払居師江金子差出村居ニ仕、御年貢上納仕候儀ニ付、囲ひ置候米無御座、囲ひ米難取計迷惑仕候間、右無余儀訳合御

賢察被成下、囲ひ米之儀 御免被成下候様仕度奉願上候、右之通ニ御座候得とも是非々々囲米不致候半而ハ難成儀ニ御座候ハ、御年貢之儀ハ右之通ニ而皆済仕、別段ニ右御払居之半数十五石頭分ニ而他所米相求、囲ひ置候様可仕候得とも、可相成御儀ニ御座候ハ、他所米囲ひ方共御免被成下候様仕度奉願上候、願之通被仰付被下置候ハ、難有仕合可奉存候、以上

巳十月 庄屋 四郎兵衛㊤
組頭 嘉右衛門㊤
同断 弥平太㊤
頭百姓惣代森田長八㊤

小山清次郎様御陣屋

これは、1833 年（天保 4 年）に横須賀陣屋に提出された願書である。この願書によれば、一色村の年貢米は 30 石であり、久村（現南知多町）の内藤傳兵衛の取扱で「御払居」とした。取扱者は異なるが、村高に相当する程度の年貢高は先にみた嘉永・安政期と同じである。この 30 石の年貢米に対して、領主側から半分の 15 石を「金主」つまり入札者が備蓄しておくように命じられた。この備蓄の指示は 1833 年（天保 4 年）という凶作・飢饉の時期の臨時的な対応策と思われる。

この指示に対して、一色村は 15 石の備蓄は困難であるため、備蓄の免除または他所米の購入による備蓄のいずれか、それでもできれば備蓄の免除を願い出ている。他所米の購入は「頭分」が行うとされており、これまで検討してきた一色村の構造からすれば、「本役」を勤める家が中心となり購入資金を提供することになると思われる。

15 石の備蓄が困難である理由に、一色村の「御払居」の実態が記されている。一般的な方法であれば第三者の入札者から「御払居師」、つまり払居米を取り扱う人物（一色村の例であれば岩本弥左衛門や内藤傳兵衛）に入札金が渡される。しかし、一色村では村が「御払居師」に年貢分の金銭を支払い、「村居」として村で保有するのが例年の年貢上納方法であるという。

払居師への代金支払を完了すれば「村居」の米 30 石は村の裁量で処分できることになる。その

なかから 15 石の備蓄米を捻出することも、米を保有したままであれば可能であろう。「村居」の米では備蓄ができない、他所から米を購入しなければ備蓄ができない、という一色村の主張は、「村居」の米が存在しないという実態を表している。

この実態については 2 通りの解釈があるように思える。一つは、当初「村居」の米は存在していたが、すでに処分が完了しているか処分方法が決定しているというケースである。とすれば、領主側の年貢収納や備荒貯蓄などの政策意図とは無関係に、一色村の実態は村が払居米制によって保有した米を村の資産として処分・運用している姿を示すことになろう。

もう一つは、当初から「村居」の米は存在せず、年貢米入札相当の金額を村が払居師に支払って年貢に充当しているというケースである。これは【史料 10】にある年貢米の確保が困難であるという村の状況と整合的である。

この場合、なぜ一色村は払居米という形態で年貢上納するのだろうか。年貢相当分を金銭で納めるのであれば、秋の年貢割付を待って金納する方法もあるはずである。領主の立場からすれば、払居米制は年貢相当分の収入を春先に得ることができるという利点がある。しかし、村にとっては、年貢相当分の金銭を納めるのであれば、秋に金納しても基本的に相違はない。このような年貢納入の形が成立した経緯は不明であるが、通例となっている以上は領主も認めているということであろう。一色村においては夫食分も含めて米は収穫するものではなく、他所から買い入れるものであった。

村高に匹敵するほどの年貢高、実際の米の姿が見えない年貢納入の形、これを認めている領主と受け入れている村、一色村の年貢に関する史料からはこのような実態がうかがえる。村高を元に 30～50% 台の年貢率で年貢を割り付け、現物の米またはそれを換算した金銭で上納させるという一般的に想定される年貢上納の形とは大きく異なっていることが指摘できる。

むすびにかえて

本稿では、職能を活かした他所稼ぎ、世帯筆頭者を欠いた多数の家族、高によらず独自の係数による村内の諸負担の分担方法、「本役」以外の家々も保有する蔵・物置、高率で現物の米が介在しない年貢など、一色村の成り立ち方を史料に基づき明らかにした。これは、農業生産力のあまりない狭い土地に多くの人々が居住している、また漁業や廻船業を主たる生業としている、という一色村の特徴に規定されて、つくりあげられてきた独自の村の姿であろう。

耕地や生業のあり様についていえば、一色村は極端な事例かもしれない。しかし、耕地に恵まれない村、農業以外の生業・産業が発達した村は知多半島内にいくつもある。知多半島に限らず、どの地域のどの村にも個性、つまり村独自の成り立ち方が存在すると考えるのが自然であろう。「村」としてひとまとめにする前に、まず村の個性を考えることが必要ではないだろうか。

知多郡の村々を考える場合、「寛文村々覚書」、「尾張徇行記」などの地誌類が利用されることが多い。これらの地誌類は村況や特徴を端的に表しているため、村の概要をつかむためには有効である。しかし、これだけでは本稿で提示したような生きている村の姿はわからない。

本稿では一色村の実態を検討するのに数点の村方文書を使ったにすぎない。そのため、個々の史料からうかがえる村の特徴の一端を指摘するにとどまっている。ここからもう一步踏み込んで村の実像を豊かに描くためには、ある程度の規模を持った村方文書の史料群が必要となる。愛知県史の編さんにとまなう文書調査などで、知多半島の村方文書の発掘および整理が進められているが、文書の散逸防止、調査整理の進展などに向けての努力が今後も求められている。

注一覧

- (1) 美浜町誌編さん委員会編集、美浜町発行、1980～1985年。
- (2) 前掲『美浜町誌』、末永国紀「近世後期における塩の流通と廻船商業活動」『経済學論叢』

- 20-6 (1973年1月) など。
- (3) 『美浜町誌』本文編 p113。
- (4) 『美浜町誌』本文編 p114。
- (5) 『美浜町誌』資料編一 (美浜町誌編さん委員会編集、美浜町発行、1980年)。
- (6) 『名古屋叢書続編』第8巻 (名古屋市教育委員会編集・発行、1969年)。のち愛知県郷土資料刊行会復刻刊行 (1976年)。
- (7) 木村礎校訂、東京堂出版発行、1995年。
- (8) 「諸願達之控」(正蔵寺所蔵)。
- (9) 前掲 (5) 参照。
- (10) 『名古屋叢書続編』第3巻 (名古屋市教育委員会編集・発行、1966年)。
- (11) 「尾張徇行記」(前掲注 (6))。
- (12) 『美浜町誌』本文編 pp.178-217。
- (13) 徳川林政史研究所 HP 上で、目録は公開されている。
- (14) 徳川林政史所蔵知多郡史料のうち。
- (15) 『美浜町誌』本文編 p186。
- (16) 石井謙治『江戸海運と弁才船』(財団法人日本海事広報協会発行、1988年) p168 掲載の表による。
- (17) 盛田家文書 I-103「御触状留」(鈴溪資料館所蔵)。
- (18) 「諸願達之控」。
- (19) 『新修半田市誌』本文篇上巻 (半田市誌編さん委員会編集、半田市発行、1989年) pp.630-633 ほか。しかし、払居米制は単なる酒造奨励策ではない。尾張藩の財政政策や江戸屋敷などを含めた資金の実際の動かし方なども含めて、払居米制の意義・役割を考えることが必要である。
- (20) 「諸願達之控」。
- (21) 「諸願達之控」。

